

### 【3】生徒の実態

本年度も、指導を展開するにあたり、様々な方法での実態把握に努めた。調査結果から、個人および学部全体の傾向や留意点を探り、指導に生かしていくことにした。また、各実態調査の結果は、指導前と指導後と比較するための基礎資料とするため、できるだけ毎年継続していきたいと考えている。

#### (1) 集団編成

学年	担任		生徒		主な障害	略記号及び教育歴	
	男	女	男	女			
1年	2		5		・自閉症 ・小頭症	本校小学部～	K男 H子
	0	2	3	2	・9P-症候群	他校より入学	D男 U男 Y子
2年	2		7		・自閉症 ・感覚統合不全	本校小学部～	L男 G男
	1	1	7	0	・ダウン症 ・てんかん	他校より入学	M男 A男 N男 H男 S男
3年	2		9		・プラダウィリー-症候群 ・自閉症	本校小学部～	C男 F男 R子
	1	1	7	2	・てんかん ・水頭症	他校より入学	Z男 O男 B男 I男 E男 M子

今年度、21名の中学部生徒の基礎（学級）集団の編成は、上の表に示すとおりである。学年進行・複数担任制を採り入れているが、体育・音楽は学部合同で、課題学習は、学級の中で発達課題別、作業学習はコース制（手工芸、陶芸、農園）を取り入れている。また、生活単元学習は、単元により、学部合同、学級を解いた縦割りグループ、学級単位と自在に組んでいる。このように、多様な集団を保障することにより、様々な関わりが持てるよう配慮している。

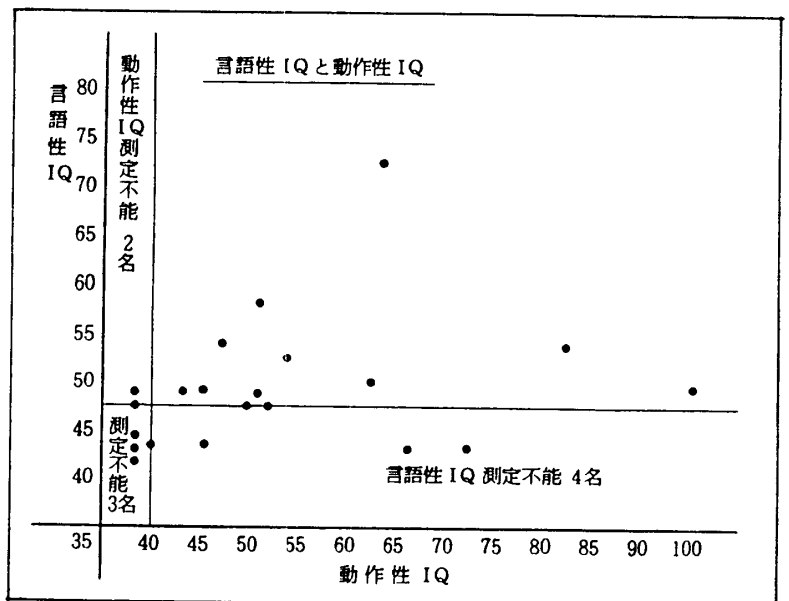
#### (2) WISC-R知能検査（1年 H6.5実施 2・3年 H5.5実施）

〔目的〕 生徒の知能や言語性・動作性の個人内差を把握し、指導の手立てや方法を探る。

〔考察〕 全IQの結果は、IQ40以下

でWISC-Rでは測定できない生徒は8名、IQ40～50は6名、IQ50～75は7名と、重度から軽度まで差がある。

言語性IQと動作性IQの個人内差を見ると、右の図のように、15以上のIQの差がある生徒が4名おり、いずれも言語性より動作性のIQが優位となっている。この生徒には、視覚優位であることを考慮したコミュニケーション手段や環境を考えていく必要がある。他の生徒には、多面的なことばの働きかけをしていきたい。

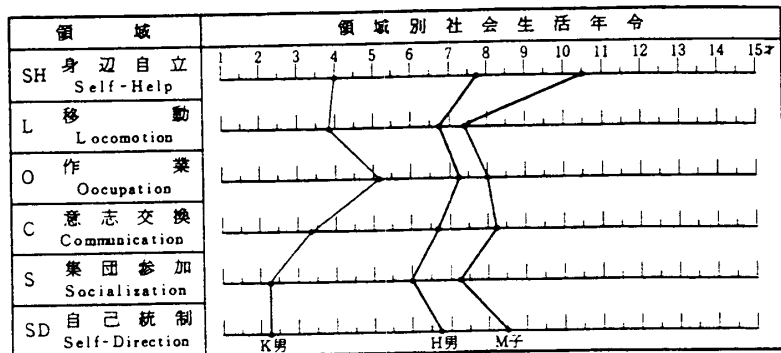


言語性IQと動作性IQの個人内差

### (3) S-M社会生活能力検査 (H6.5実施)

〔目的〕 具体的な生活場面における知的な働きや技能の程度を知り、生徒の社会的な生活能力を把握する。

〔考察〕 一人ひとりの社会生活年齢 (SA) については、120頁の資料に示すとおりで、2歳10か月～5歳未満が5名、5歳～8歳未満が9名、8歳～10歳が7名である。この7名



領域別社会生活年齢

の中で、M男やR子は社会生活年齢がそれぞれ8歳4か月と8歳3か月であるが、知能検査の全IQにおいては、46と43であり、それほど高くはない。知的な面での遅れを本人の意欲や生活体験でカバーしながら社会的な生活能力を身につけてきている例と考えられる。

そして、全般的に、上図のK男やH男のように、身辺自立や作業面に比べ、意志交換や集団参加の領域で落ち込みが見られる生徒が多い。このような点を配慮しながら、社会化をめざす中学部の取り組みにより、さらに社会生活能力を育てていきたい。

### (4) コミュニケーション・サンプル (H6.5実施)

〔目的〕 生活の流れにそった自然な場面を選び、生徒のコミュニケーション行動を記録し、ことばの機能や文脈、形態について分析・評価し、指導に役立てる。

〔考察〕 中学部の生徒は、下の表にも示すとおり、全員が表出言語を持ち、教師や友だちと会話ができる。しかし、発することばがパターン化され、使い慣れたことばに限られる生徒から、情報提供や情報請求が次々とできる生徒まで、実態は様々である。

コミュニケーション・サンプルの評価例

108頁のA男の評価に示されるように、昨年度より、内容が豊かになってきている生徒もかなり見られる。右の表のF男のような生徒には表出言語を用いてのコミュニケーションをより増やしてやり、E男のような生徒には伝えたいことを一度整理してから話させる、というように、個に応じた指導を行っていく必要がある。

I 男	<ul style="list-style-type: none"> <li>●説明が多い。</li> <li>●先生・友だちどちらともよく話す。</li> <li>●表出言語あり。</li> </ul>
C 男	<ul style="list-style-type: none"> <li>●目の前の出来事に対して素直に感想を言ったり説明したりする。説明や情報請求が多い。</li> <li>●先生・友だちどちらにもよく話しかける。</li> <li>●表出言語あり。</li> </ul>
F 男	<ul style="list-style-type: none"> <li>●要求・注意喚起・拒否が多い。</li> <li>●先生との関わりが主である。</li> <li>●要求は、直接、動作により示すことが多い。</li> </ul>
E 男	<ul style="list-style-type: none"> <li>●自分の経験や受けた印象をすべて説明し、情報提供しようとする。</li> <li>●先生・友だちどちらともよく話す。</li> <li>●表出言語あり。</li> </ul>
R 子	<ul style="list-style-type: none"> <li>●説明・情報提供・注意喚起が多い。</li> <li>●先生・友だち (男女) どちらともよく話す。</li> <li>●表出言語あり。</li> </ul>
M 子	<ul style="list-style-type: none"> <li>●説明・情報提供・要求が多い。</li> <li>●先生・友だちどちらともよく関わって話す。</li> <li>●表出言語あり。</li> </ul>

(5) 養護・訓練及び基礎学力における実態 (H6.5実施)

〔目的〕 養護・訓練及び基礎学力を把握し、課題学習における一人ひとりの最優先とされる課題を明らかにし、個人目標の設定をする。

〔考察〕 基礎学力(国語・数学)における実態の例は下の表に示すとおりである。90頁の課題学習による実践で述べるように、今年度は、昨年度までの基礎学力に加え、養護・訓練を含めた中からその生徒にとって最優先の課題を選び、毎日継続して取り組む中で定着させようと考えた。生徒によって、課題は養護・訓練に重きがおかれる者、基礎学力におかれる者、両方に取り組む必要がある者と様々である。

基礎学力(国語・数学)の実態例

名前	国語		数	学
	言語・文字の習得	理解・表現(話す・聞く)	数と計算	お金・時計
L男	<ul style="list-style-type: none"> <li>ひらがなは50音読める。</li> <li>身近な漢字やカタカナなら読めるものもある。</li> <li>なぞり書きやワープロができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発音はやや不明瞭</li> <li>単語の羅列、挨拶・返事などができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>30までの数唱ができる。</li> <li>10までの数の判別ができる。</li> <li>1対1対応は具体物を使ってできる。</li> </ul>	
G男	<ul style="list-style-type: none"> <li>漢字 1年：5割程度</li> <li>生活に身近な漢字は使えるが、筆順は不正確</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>簡単な文は読むが理解は苦手</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>10までの数の加法はできる。</li> <li>半具体物を使って5までの減法ができる。</li> <li>数唱は100まで</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>時計はデジタルなら読める。</li> <li>お釣りのいる買い物ができる。</li> </ul>
M男	<ul style="list-style-type: none"> <li>50音のひらがなの読み書きができる。(構音障害のため間違っ読書している言葉が多い)</li> <li>文字の形がとりにくく読みにくい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発音が不明瞭で聞きとりにくい。</li> <li>勝手な思い込みで言葉の意味理解が不確実な事がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>100までの数字は読めるが、数唱は具体物がないとあやふや</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>時計は分針も読める。</li> <li>金種を理解して1000円くらいまで使える。</li> </ul>
A男	<ul style="list-style-type: none"> <li>漢字 1-5年：ほぼ全部</li> <li>6年：9割程度</li> <li>筆順は不正確だが、丁寧な文字が書ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>助詞が正しく使えない。</li> <li>簡単な文章の理解ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>計算 2位数+2位数</li> <li>2位数-2位数</li> <li>1位数×1位数</li> <li>簡単な文章題はできる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>時計は分針まで読め、あと何分も計算できる。</li> </ul>

(6) 段階別教育内容表のⅣ段階到達度評価 (H6.5、H6.10実施)

〔目的〕 中学部は、段階別教育内容表のⅣ段階の習得を目標にしている。その各分野、各項目の内容がどの程度身についているかを評価し、Ⅳ段階までの習得率を次頁図2のようなクライモグラフにまとめる。このグラフが広がっていくことにより、社会的自立が達成されていくと考える。

〔考察〕 117頁のB男のように、全体的に広がり小さく、身辺処理の確立をめざしながら、将来の自己実現の場を見極めていく必要のある生徒が5名いる。しかし、B男の例でも分かるように、グラフは小さいながらも、それぞれの生徒が力をつけてグラフをおし広げてきており、成長のあとが見られる。

また、図2のR子の例のように、Ⅳ段階のラインにはほぼ達しつつあり、社会化を中心にさらに広がりを期待したい生徒が10名と半数を占める。

そして、グラフの各項目が大きな拡がりを見せており、V段階の力を身につけつつある生徒が6名おり、昨年より3名増えている。さらに、生きて働く力にまで高めていきたい。

(7) その他の実態

〔目的〕家庭生活の実態を把握するための「生活リズム調査」、また第二次性徴期を迎える中学部の生徒の「性に関する実態」をつかむため、表2のような調査を実施する。この結果を、コミュニケーションに視点をあてた取り組みにも、家庭と連携を取りながら生かしていく。

〔考察〕「生活リズム調査」の結果については、98頁で詳しく述べるが、本校の生徒は中学生になってからも母親との関わりが一番多く、家庭で何か話すとすれば、学校のことに限られがちである。活動範囲を見ると、家庭の中に子どもを囲いこんでいる傾向がある。しかし、家庭の多くが、子どもに対してコミュニケーションの力の向上を願っている。

「性に関する調査」

では、確実に表れてきている第二次性徴の発現の様子がよくわかった。異性や性的なことへの関心は、学校では見られても、家庭では表れなかったり親が気づいていなかったりする傾向がある。

家庭と、度々連絡を取り共通理解をしながら指導していく必要がある。また、発達段階に応じたグループ毎の指導も有効だと思われる。

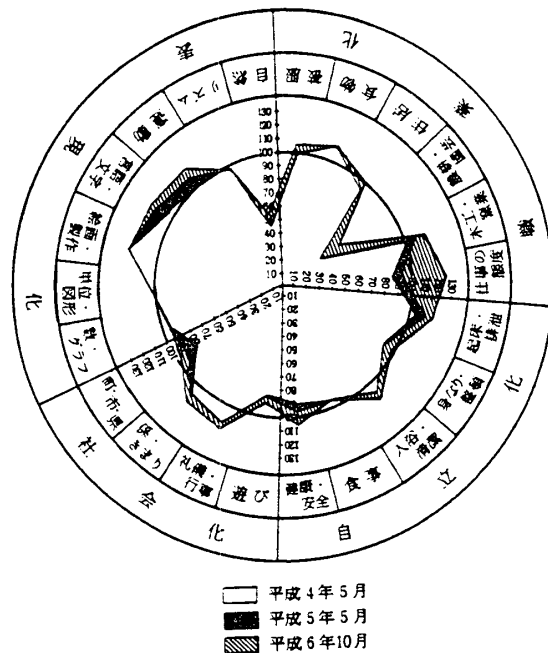


図2 段階別教育内容表V段階別到達度評価 (R子)

表2 性に関する実態調査結果 (抜粋)

1. 次に挙げる項目であなたのお子さんについてみられるものを選んで、○をつけてください。(いくつでも○をしてください)
  - イ. 性器の発毛 14名    ロ. 脇の発毛 9名    ハ. ひげ 9名
  - ニ. 精通 2名    ホ. 自慰 2名    ヘ. 月経 4名    ト. 声がわり 5名
2. 家族との会話の中に、異性の友だちの話題が出ますか。
  - イ. はい 3名    ロ. いいえ 18名
3. 異性に触れたがりますか。
  - イ. はい 2名    ロ. いいえ 19名
4. 性的な言葉を口にしますか。
  - イ. はい 2名    ロ. いいえ 19名
5. テレビ番組のエッチな場面が好きですか。
  - イ. はい 3名 (恥ずかしそうに見ている)    ロ. いいえ 18名
6. ポルノ雑誌などの雑誌や漫画に興味を示しますか。
  - イ. はい 2名    ロ. いいえ 19名
7. 家庭で性に関して問題だと感じていることを記入してください。
  - ・何を話していいかわからない。
  - ・自慰について教えたことはあるが、理解できないようだった。
  - ・月経について対処の仕方だけ話したが、それ以上の話がしにくい。
  - ・本人に精通があるかどうか、よくわからない。
  - ・心身の変化を含めて親子で話をしたが、女の子なので、性被害について心配している。